答志島　～　伝統を生かしながら新しくなる島

海の博物館　石原義剛

はじめに

日本は４つの大きな島と４２２の小さな人の住む島と６０００の無人小島からなる島の国である。人は佐渡島や淡路島くらいの大きさまでは、周りに海がいつもあるので、島だと認識するが、４つの大きな島になると、島と意識することは少ない。そこに住んでいる１億２千万人ほどの日本人は、近年、とくに島に住んでいるという意識を持たなくなっている。外国へ出かけるのに、船乗り以外は海を船で行くことは稀で、飛行機であっという間に行ってしまう。海を職業の場としてきた船乗りや漁師になろうという者も極く少なくなった。潮干狩りや海水浴といった海での楽しい遊びは健康な休養ではなくなった。日本人は意識の中から海を失いつつある。

わたしは海辺で育ったし、学生の時代には時間があると日本の海岸を旅して歩いていた。10 年近く都会でサラリーマン勤めをした後、郷里に帰って定置網漁業を経営していたこともある。今も漁業や海運をテーマとする博物館をやっているので、当然だが、いつも海と付き合っている。だから随分島を訪ねたつもりだが、数えてみたら４２２島のうち僅かに１００程しか行っていないと判った。それでも他人様よりは少し多いのだろう。

訪ねた１００の島は、どれも面白かったし、印象的だった。沖縄、奄美の琉球弧の島々、対馬、壱岐、五島。天草諸島。忘れられないのが軍艦島（端島）。多島海なる瀬戸内の島々、隠岐も好きだ。伊豆七島とくに八丈島。佐渡と粟島。

近年は島の人口がどんどん減り、無人島になるところもでているが、太古いつのころからか島々に人が住みついたのは、住み着いた理由があったのであろう。その島が無人島になる理由も同じようにあるのだろう。

わたしたちは、今日こそその理由を考えて見る必要があるのではないだろうかと思う。なぜならひょっとすると同じ理由で大きな島である４つもやがて無人島になるかもしれないから。１００の島を訪れるうちに、わたしはどの島も大きな島のミニチュアに成りかかっていると思えるようになっていたからである。確かに平地と耕す地もすくない島、水に恵まれない島、森林を持たぬ島もある。しかし、それでも人は住んでいるし、それなりに島の独立性を保っている。現代社会においては行政が地域の面倒をみるシステムが確立しているから、島は独立性を固持するよりは行政に依存する楽な方策を選んでいる。その結果、島は自立性を失い、島が長い間保持してきた島独自の力を失くしてしまった。

小さな島に生き生きと存在していた“独立国”は崩壊してしまった。

そんな今日において、まだ島の独立性をなんとか維持している島が三重県鳥羽市にある。答志という。この島を、この講座でわたしに与えられた「生活文化」というテーマから見てみようと思う。

１；島の概要

・位置と大きさ

答志島は、伊勢湾口の西入り口側に在り、鳥羽湾を塞ぐように横臥っている。面積７ｋｍ２、東西６ｋｍ、南北１．５ｋｍ。もっとも高い山は１６７ｍ。

島には３つの集落があるが、島の東端の北に「答志」、南に「和具浦」があるが、両集落は小学校を挟んでほぼ続いている。「桃取」は反対の西端に位置している。

答志への交通アクセスは市営定期船のみで、鳥羽佐田浜港マリンターミナルから 40 分。

１日 4 往復。島へは別に、和具浦へ 15 分、桃取へ 20 分の市営定期船が出ている。

・人口

答志と和具浦の２つの集落を合わせて答志地区という。島全体の人口は、減少をつづけているが、下記の如

くで、昭和 40 年代とくらべて、今日、他の離島の多くが人口を 60%近く減らしているのにくらべれば減少率は少なく、答志はいまだに１３１３人を保っている。

250 余年前、延享 2（1745）年の戸数は２７８、人口は１２１２人であった。(「鳥羽領内村々禄高調」）時間は飛んで戦後の昭和 24 年になると人口は３０００人に急増するが、戸数は５２７にとどまっている。

	答志島全体	答志のみ
昭和 40（1965）年	８２６世帯　３２２６人	（答志３７０世帯１９２１人）
昭和 60（1985）年	８３０世帯　３５４２人	（答志３７９世帯１７０７人）
平成 15（2003）年	７６５世帯　２９９５人	（答志３３９世帯１４９６人）
平成 22（2010）年	７６５世帯　２６２６人	（答志３３７世帯１３１３人）

なお、この世帯の中に農業を営むものはゼロである。

２；歴史

答志島には縄文時代から弥生時代、そして古墳時代にかけての幾つもの遺跡があり、出土品も多い。この島に非常に古くから人が多く住み着いていたことを示している。島のすぐ東にある大築海島にも縄文遺跡があり、こんな離島の小島までなぜ人が住んでいたのか、不思議だ。

歴史時代になると、文字の上に『答志』が現れ、この島が都の古代人にも知られた島であったことが判る。

・和銅５（７１２）年　手節（答志）里より調として「藻根」を出す
・養老３（７１９）年　答志郡になる
・承和７（８４０）年　仁明天皇から常康親王に答志領を賜る

とりわけ「万葉集」に、持統女帝が伊勢に行幸された時、都で柿本人麻呂が作ったという

叙著く（くしろつく）手節の埼に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ

の歌は、「手節（答志)」が宮廷人にもよく認識されていたことを伝えている。

延喜年間（～927）に成立した「延喜式」の中に、答志郡より都へ送られた調として下記のようなものが記載されている。アワビ、カツオ、ナマコ、さまざまな魚類、海藻も今日以上に食べられていたらしい。ノリ、ミル、ワカメ、オゴノリ、テングサ、アラメなど。

「御取鰒、雑鰒、堅魚、熬海鼠、雑楚割、雑魚脯、雑腊、雑鮨、漬塩雑魚
紫菜、海松、鹿角菜、海藻、海藻根、小凝菜、角俣菜、於胡菜、滑海菜」

これらの海産物は、当時、貴重なものであったに相違なく、答志島だけではなく、当時の答志郡に含まれていた志摩の地が深く都と関係を持っていたことは間違いない。

その後も、中世から戦国時代にかけて、伊勢湾口は東西交通の要衝であったから漁業を平常時の仕事としながらも、海運に携わるとともに、時には沖を通る船に対して略奪をはたらく海賊に豹変することもあった。戦国時代に織田信長の配下と成った九鬼嘉隆は、海上戦闘で勝利し勢力を拡大しながら、日本における「水軍」を形成していった。答志島の漁民たちも逞しく優れた操船技術を持った船頭・水夫として働いたに相違ない。

九鬼嘉隆（1546～1600）は文禄の役（1592）の朝鮮出兵には日本水軍の総大将として参戦するが、慶長の役時（1598）は隠居していた。しかし、関ヶ原の戦いでは石田三成について西軍に加わり、息守隆の加わった東軍に破れて自刃した。嘉隆の胴塚と首塚は今かれの愛した答志島（和具浦）に残っている。

徳川幕府は国を閉ざしたが、平和とともに経済的な繁栄をもたらした。米を中心に豊富になった物資は、整備された東西廻船航路を弁財船によって、江戸、大坂へ集中的に運ばれた。

西回り航路・海の東海道の三差路の中心港として、以来、鳥羽湊はほぼ 3 百 50 年間、繁栄を極める。

３；漁業に生きる答志

先に記したように、答志島には三つの集落があるが、ここに記しているのはその中の「答志」のことである。

答志には現在・鳥羽磯部漁業協同組合答志支所があるが、平成 14 年の合併までは、この集落単独の答志漁業協同組合であった。現在の組合員数は、正組合員１４４、準組合員１３５。数年前、旧組合の時代は２８０組合員だったが、合併時に組合員を水産業協同組合法の規定により、漁業の操業日数など、資格審査によって厳格に正組合員・準組合員に分けた。ただし１組合員は１世帯を基準にしており、妻や子どもが漁業に従事するのは組合員の権利のうちに含まれている。しかし、妻や子どもには総会などの出席権はなく、投票権もない。本来は組合員は個人が原則であるから、答志は変則的で、古い家を基本とした慣習が残っている。

30 年前の昭和 56（1981）年度の旧組合の組合員数は、正１９０、準１１０の合計３００であった。注目して欲しいのは、現在の組合員数が僅かしか減っていないことである。三重県内の漁業者数が 50 年前の 10 分の 1 近くに減少している状況からみれば、信じられない。また従事者数は下記のようになっている。上に記したように、一家を１組合員とするので家族は従事者となる。

昭和 49（1974）年度	54（1979）	59（1984）
462 人	462 人	489 人

現在の正確な従業員数は把握できないが１組合員あたり家族 3 人が働いていると推定すれば、ほぼ 430 人くらいになる。答志の漁業従事者は漸減気味では有るが大きく減少している訳ではない。

なお、組合員ではないが、答志漁業と深く係わっているのが、指定商人といわれう仲買人で 35 人（三重県漁連などの法人も含む）おり、他に加工業者もいるが、加工業者の多くは仲買人を兼ねている。この数字も答志の漁業がまだ活発に動いていることを示している。

３３年前の昭和 52（1977）年度、水揚量１４４５（黒海苔８９０万枚）トン、金額 9 億 4 千 5 百万円であった。

漁協の平成 21 年度の水揚金額は、9 億 2 千万円を揚げている。279 戸（組合員数）の漁家で単純に割っても 376 万円になる。この数字は半分ほどの準組合員を含んでいることを考慮すれば高い額である。

水揚金額（答志以外を除く）	総水揚金額	うちバッチ網・船曳き網
平成 15（2003）年	１．２４３百万円	４４２百万円
平成 17（2005）年	１．３９４〃	５８３〃
平成 21（2009）年	１．０５４〃	５２５〃

鳥羽市水産係統計

平成 23 年現在、三重県の漁村でもっとも元気のあるのが答志島で、その中でも答志地区は盛んな漁業地区である。ここが湾口にあり魚種が多種で豊富なことを示しているのが、組合支所にある２０の内部組合であろう。

きす網	磯建網（イセエビ刺し網も含む）
バッチ網	船曳き
たこつぼ	太刀釣り（タチウオ釣り）
鰆網（流し刺し網）	えび曳き
掛業	一本釣り
黒のり	若布
魚米（魚と米で一字。コオナゴ）掬い	遊漁、
さより曳き	延縄
ふぐ縄	あじ釣
さば釣	海女

以上 20 組合内漁業種別組合

現在、答志で有力な漁業は、10～20 トンクラスの漁船 2 隻と運搬船 1 隻によってするバッチ網漁で全部で 5 人乗り、これが地区で規模の大きな漁業である。17 統（組）あり、コウナゴ、カタクチイワシ、シラス（カタクチイワシの稚魚）を捕っている。他はすべて 1 人か 2 人乗りの小規模な漁である。

しかし、そこに答志漁業の強さが秘められている。遊漁を除くと 19 の種別組合があるように、漁業種別が多いこと、すなわち豊富な魚種に恵まれているのだ。種別組合へ年間一定の加入費を払えば複数の加入が可能である。多くの漁家は,夏季と冬季、来遊する魚種などに応じて、幾つもの漁法を営んでいる。バッチ網の連中も冬になって、漁期が過ぎると鰆（サワラ）網や釣りに転じる。

平成 21 年度では 10 億余円の答志総水揚の内 5.2 億円がバッチ網・船曳き網と半数を占めている。また黒ノリ養殖も 2 億円ほどになっている。ただ共に資材、経費の多く要する漁業である。

伊勢湾口に位置する答志の漁場は、伊勢湾から出て行こうとする海水と太平洋（遠州灘）の外洋水が入れ換わる場所にあり、潮流は激しく動き、ぶつかった海水により潮目ができる。豊富な栄養塩によりプランクトンが大量に繁殖し、魚類に好餌場を提供している。

したがってここには、沿岸魚は常時集まるが、回遊魚も季節により群来する。

昭和 30 年代にＦＲＰ動力船が普及し、ナイロン網と魚群探知機が採用されて、この地の漁業は漁獲量を増した。一昔前の、無動力船で破れやすい木綿網の時代からは信じられない漁獲であった。さらに、度々台風や高潮に悩まされて来た海岸に、立派な防波堤を持った漁港・漁港施設が建設されていった。冷凍施設や短期の蓄養設備も漁獲増に結びついた。

答志の恵まれていたのは、沿岸での漁業のみで暮らしをたててゆけたことである。日帰り範囲の漁場が周囲にあった。潮変わりの早い海岸には海藻類が多種に繁茂していた。

それでも昭和 40~50 年代、漁具漁法の技術進歩と漁業者数の過剰が、乱獲気味の漁獲になって漁場を荒廃させていった。その上、伊勢湾奥部の石油・重化学コンビナートの形成、
巨大都市の成長による汚排水の流入が、赤潮や青潮（貧酸素水塊）の発生に見られるように、漁場を悪化させていった。

昭和 40 年代半ばになると、より安定的で高い収入が望めたノリ養殖が取り入れられた。同時期には沿岸のアワビ資源の減少を補うため稚貝の放流事業も進められるようになった。
これらは国の漁業政策「とる漁業からつくる漁業へ」の方針に乗ったものだった。

いくつかの激しい変転を経ながらも、答志地区の漁業は他地と比べてだが、著しい衰退を意識することなく過ごして来たといえる。

“飯は漁業で食う”。離島・答志にとって今後の「持続する漁業」への漁業者を中心とした島人の意識改革の必要は必至であろう。

答志には、古くから女性も男と共に働くという習慣がある。どこの漁村でも水揚された漁獲物の仕分けや運搬、漁具の掃除や整理では女性の働く姿を見ることがあるが、船に乗って沖へ漁にでるのを見るところは少ない。女性を漁の現場から遠ざけているところの方が多い。それに対して答志では、冬のエビ刺し網やたこつぼ漁に女性が出る。ノリ養殖の期間になると、どの場面でも女性が男と変わることなく立ち働いている。近年は以前のように、答志内同士の結婚が少なくなったに係わらず、島外から来た若い嫁さんでも皆、漁師の夫と共に働くという。周りの女性の誰もが働いているから、家に一人閉じこもっているわけにはいかない。最初のうちは船酔いのエライ女性でも、慣れて元気で漁に出ていく。いつの頃からか、慣習化されてきたやり方は伝統に育っていると言えよう。

そんな習慣のはじまりは海女だったのかも知れない。現在では男性の海士も加わるようになったが、まだ圧倒的に海女が多い。答志の海女数は下のように減少している。

1949（昭和 24）年	1978（昭和 53）年	1999（平成 11）年	2011（平成 22）年
１０００	３００	８０	９６

近年、海女の漁獲対象とするアワビなどの資源の減少にもよるが、その他漁法との関連もあって、海女の出漁日数（口開け日数）は少ない。夏季のアワビ、サザエで 30 日くらい、冬のナマコ漁で数日、春にワカメ、ヒジキ

など海藻で数日である。1年中を海女漁を専業として暮らすことはこの地ではない。
　イセエビ漁、タコ壺、一本釣りなどは、島のごく近い海で行われるので安全性は高い。その上極端な大漁もない。楽しみながら一定の収入にはなる。したがって 80 歳時には 90 歳になっても漁ができる。

４；島は“共同体”
　ほぼ 100%を漁業に頼る答志では、漁業を出来る限り持続的に、公平な配分が出来るように共同体の維持が必須である。古くは「村張り」といわれる数十人がする網漁法もあったし、漁港も整っていなかったから船揚げ作業にも多くの人手を要し、協同的な働きは不可欠であった。その後、漁業・漁港などの近代化が進み、労働現場での共同作業は少なくなったが、反面で漁法が個人的になったため、漁期、漁期間、漁場の利用など守らねばならない約束事・規約が新たに生じてきた。抜け駆けする者が出れば漁業は維持できなくなる。“共同体の重要性はますます増していると言えよう。
　島には、たくさんの団体がある。町内会、老人会、婦人会、そして漁業関係では漁協、地区漁業運営委員会、漁協青壮年部、漁協婦人部。ほかに学校のＰＴＡ、消防団である。
商業では水産加工業者の集まり、旅館組合、民宿組合。
　ある日、老人会の総会があった。この地では 400 人以上が入っているという。その総会には来賓として町内会長はもちろん漁協長、婦人会長、学校長、神主、そして消防団長など地区の役員すべてが列席した。
　この小さな島になぜこんなに多くの団体があるのか。これはまさに島“共同体”のゆえんである。では共同体はどのような役割を果たしているのだろうか。
　今でも漁村を訪ねていると、人々が明るく親切なのに気付く。彼らは他人の悪口を決して言わない。人々が集って話していることはあっても、無為に怠けている者を見かけることはない。それと判る極貧の人を見ることもない。すなわちここでは不仲や怠け者や極貧者といった共同体を壊す要因をみんなで自然と取り除いているのである。マイナス要因がないからこそ、共同体が成り立ち絆が生まれる。
　さらに長い間、結婚を縁とする血縁関係で縦横に結ばれてきた“共同体”が根を張っているのである。

５；素晴らしきかな、寝屋子制度
　寝屋は、答志集落にほぼ 10 組で、多い時は 12 組あったこともある。また 1 組に各 11～12 人の寝屋子がいたこともあるが、現在は 10 組で各 4~5 人。今は少子化のため毎年 1 組が出来るだけで 2 組出来るのは稀である。
　中学卒業の 15 歳で寝屋に加わる。長男は総て必ず、次男以下は任意。2 月頃に親たちが相談して適当な「寝屋親」に頼む。「寝屋親」の条件は、親として信頼できる人であり、その家が寝屋子らが寝泊まりするに十分な部屋を持っていることが必要である。その後、3 月末になると蒲団を運び込む。4 月から寝屋子の共同生活がはじまる。以前は夜、共に就眠したが、最近は高校が島の外にあるため、また子らが個室を持っているため、毎日寝屋で寝ることはなく、土曜日のみ寝屋に集まる。25 歳は厄年で結婚しないので、24 か 26 にすることが多く、結婚すると寝屋をでる。この間ほぼ 10 年、さらに出た後も終生「寝屋子の朋輩（ほうばい）」の親密な親子より強い関係が続く。
　寝屋親Ｙさんの寝屋子仲間（平成 5 年に出来た寝屋子）の平成 23 年現在の職業は下記のようである。８人の寝屋子のうち、サラリーマン 3 人（東京・名古屋・伊勢で勤務）、鳥羽市役所１人、水産販売１人、漁師１人、運搬船船長１人、保険会社１人。残念ながら、答志で漁師になっているのはわずかに１人である。ほぼ寝屋子のすべてが、島か近くの鳥羽市内で働き先を持った時代からみると、様変わりしている。
　答志では、若衆宿の変形として明治以降に「寝屋子制度」の形が定着したらしい。この慣習は長男相続の維持、漁村労働力の確保など大きな役割を果たしてきた。また漁業権の継承のために、必ず男子で家を継ぐものがいることが必要だから、寝屋子制度は漁業継承上では大きな意味を持ってきた。
　さらに祖父、父親、本人と続く肉親を越える「朋輩」の関係が網の目のようにできて、漁村共同体の絆が非常

に強くなる。

ただ今日では、学校制度の変更や進学、家の構造の変化などにより、寝屋子制度は大きく変形しつつある。

６；変わりゆく島の暮らし

過去 30 年ほどの間に、島の暮らしは大きく変貌した。その幾つかを紹介しよう。

① 子育てと教育

大戦後の昭和 22 年、早くも答志に新制中学校が出来た。それまで小学校を卒業するとすぐ船に乗った（漁に出た）ものだが、中学校が出来てからは多くが高校に進学するようになった。

先に触れたが、昭和 40 年代から島の人口は減少を始め、50 年代からはその速度を速める。子どもたちが島で働かなくなった。漁師の後を継ぐ子どもが少なくなった。親は“安定した”職業を子どもたちに選択させようと、賢い漁業者づくりというよりは、良い会社へ入れるため教育に熱心になり、学校も優良な会社員や勤勉な工場労働者への教育を方向付けした。うんと勉強して公務員や医者になることを目指した。その成果は見事に現れた。

漁業は体力ばかりでなく、海での知識、経験がものを言う世界である。50 歳 60 歳はまだ現役だ。したがって若者が島外へ出て行っても、昭和 40~50 年代はそれほど危機感を持たなかった。しかし、平成に入る頃になると、急激に後継者の問題が浮上してきた。

少子化もあって最近の親たちは子育てに熱心だ。島の子どもたちの多くが塾に通い、スポーツクラブに入って放課後を過ごす。ために、昔のように爺さんの釣り船で海へ出たり、海辺で磯遊びに時をわすれることが無くなった。漁業者である親たちは子らを大切にはするが、どちらへ向かって進ませようかと迷いつづけている。

② 水のある生活空間

平地がほとんどない島の狭い土地に隙間なく、家が軒を接して込み合っている。家と家の間は３尺ほどの路地である。狭い路地の交差する僅かな空間に今は厚い蓋を置いて使われなくなっている井戸が残っている。この井戸の水は潮が混じって飲めない。いまは海底導管で水道が来ているが、30 余年前までは、飲み水は島の人が「産湯から末期の水まで」使ったという島の水源「西湖（にしご）の井戸」に頼っていた。

集落のあちこちに火の用心の符や歩行タバコ禁止の張り札が多い。島にとって火事は現在でも脅威である。一度もし火を出したら集落は総てが灰燼に帰してしまう。消火井戸としてまだ古井戸はうめられない。

近年、製氷やノリ養殖など、漁業においても水は需要が増しているが最も使用量を増やしているのは家庭毎に普及した風呂である。銭湯は遂に昨平成 22 年、姿を消した。本土から送水される十分な水は島の暮らし方を変えた。

③ 病院が欲しい

狭い土地を活用するため３階建ての家が新築された。家々には都会と変わらぬ電化製品が揃い、冷暖房機器も完備。コンピュータも置かれた。島には運搬用に小型トラックがあり、本土の駐車場には高級車もある。

それでも答志のどの家の戸口にも時代錯誤のような病魔退散を願う「アラクサ」が挿してある。棘のあるヒイラギと竹串に刺したカタクチイワシである。今唯一島人が切望しているのが病院と医者なのだ。特に急患（急な出産を含めて）への対応である。高齢者の増えた島の悩みがある。一時、島への架橋が熱烈に求められ促進活動が活発だった。その頃は、観光のためと物流のためが主要な目的であったが、島へ人がたくさん来ることは必ずしも良いことばかりでないと理解されるようになって、最近の一番は急患対策となっている。

④ 祭り

島の祭りは漁間期にまとめて行われるので数は多くない。旧暦の正月にある「神祭（じんさい）」は氏神様・八幡神社の祭祀である。他の祭り事は夏にある。７月頃の潮を見て「小築海（こずくみ）さん」と呼ばれている海女の口開け神事が行われる。これも八幡神社へ参拝する。天王さんと呼ばれる「天王祭」は災厄除け、病魔退散の夏祭り。さらに８月１５日の盆行事は丁重に行われる。

数少ないが答志の祭事は、集落を挙げて全員参加で挙行される。

特に「神祭」は漁協が主催して盛大だ。若者によって消炭粉（墨）で神聖に作られた「お的」が的場へ運ばれて矢が射られる。射られた的の墨は集まった子らによって争い奪われ、持ち帰って戸口に丸八を描かれる。八幡さんのマークである。集落中の人々が的場の隣の漁村舞台で演じられる獅子舞を見ようと立錐の余地もない。家々ではご馳走が並び酒宴が２日に渡って続けられる。

この日は島外に出ている若者たちもこぞって島へ帰る。漁はもちろん休み。学校も休校になる。集落中が喧騒に満ち溢れる。

７：島は未来へ向かってどう進むか

このように答志は、暮らしかたや漁業のやり方において、新しい方法をどんどん取り入れて時代に取り残されない努力を続けてきた。しかし、漁業それも沿岸漁業を基本的な生産基盤として、それ以外に暮らしの手段を持たない答志では、漁業を継続して行くために、伝統的な制度、慣習、習俗を強く引き継いできている。そのための寝屋子の制度であり、守りつづける祭りである。

多くの離島漁村が住民の高齢化、人口の減少に苦しむ状況にあるが、答志も緩やかながらその波に呑まれつつある。しかし、その波を防ぐ動きが生まれつつある。

現在、答志漁業の水揚金額の中心はバッチ網と黒ノリ養殖にあることは先に記したが、その二つの漁業はまた若い漁業者が多く担っている。資本投下もいるが収入も多い漁業は漁業者にとって魅力があるのだろう。そこへＵターンの若者が加わるようになりだした。都会の自動車工場で何年か働いた若者が父親の後を継ごうと漁師になった。大学出の漁師も生まれた。彼らはコンピュータを扱い各地の情報を手に入れ、新しい漁業づくりに意欲を持つ。しかし、まだ島社会を根底から変えるところへ行くには相当長い時間を要することだろう。

それまで島人同士が結ばれてきた結婚の有り方は消えた。若者たちは山間部や都会から嫁さんを連れて帰って来た。島外から来た嫁さんたちは旧い習慣を少しづつ破ってゆく。知らずしらずのうちに、島に新しいライフスタイルを創造してゆくだろう。

ただ残念ながら、島という狭い世界から出ることなく暮らして来た前の世代の身に染みついた生き方が残っている。そこから抜け出すにはまだまだ時間が必要だ。それを島外から来た嫁さんたちが持ち込んだ文化で切り崩して行くにそんなに多くの時間を要しないのではないか。

伝統を持続しながら、新しい島の文化と暮らしが生まれるのに期待する。